

Negative Reaction 2

- ※ 以下本編本文より抜粋
- ※ このサンプルであなたのお持ちの環境での表示を確認できます。
- ※ サンプルも成人向けです
- ※ サンプルは無料ですが、著作権はとりさんにあります。特に部分を切り取っての再配布は絶対にしないで下さい。
- ※ 本編は六章構成。作品本文約八千字弱。

僕は歯を食いしばって体を仰け反らせた。痛い！ 痛い痛い……

「やめて、ロクちゃん！」

「指入れただけや。力抜け言うてんのがわからんのか！」

苦しい。それにまた何か漏れそう。漏れそうだ……

「お前のお尻どうなってるかわかるか」

「よしや、ほならトモ君は明日からも、俺のドレイや、ええな」

「ここ、鍵かかるんやろ」

何を言っても無駄だ。僕はもうどこにも行けない。

シャツのボタンをはずして、僕はそれを脱ぎ捨てる。ロクちゃんは、大腿開きで腰を落とし、背中をドアに投げ出した。半ズボンから出た太い足は陽焼けして、小さなケガがいっぱいあって、足は靴下を穿かない素足だ。足の裏だけが妙に白くて柔らかそうだった。

その手首に冷たい感触がして、僕は怯えて体に力を入れる。

「ロクちゃん……？」

「手錠や手錠」

「え……」

僕は背中の中の両手を動かしてみた。鎖でつながっていて、自由が効かない。

「こんな嫌や……」

ロクちゃんは僕の顔の側に顔を寄せてきた。二人とも裸で、体温を感じる。

「そないして動かすから痛いんやど。あと体重かけたらな。大人しいにじっとしてたらええねん」

「何してんの！ ロクちゃんやめて！ 汚いやん……」

けんかが強いので守ってくれるとでも思っていたかもしれない。僕がドレイだなんて、理解できるはずもない。

「いやや言うてるのに……」

……

縛られた少年は、顔面や体に浴びせられた精液を拭うこともできない。手の縛めは一度解かれたが、また背中で結ばれる。そして、鎖のついた犬の首輪を、首に回された。舐めるようにその屈辱的な姿を追うビデオカメラ。少年はせめても目をかたく閉じている。古びた畳に片頬をつけ、尻を高く上げた姿勢

続きは本編で！